

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730658

研究課題名（和文）不安定社会におけるノンエリート女性の〈学校から仕事へ〉の移行に関する実証研究

研究課題名（英文）Non-Elite Women's Transition from School to Work in Late Modernity

研究代表者 杉田 真衣（SUGITA MAI）

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：50532321

研究成果の概要（和文）：東京のノンエリート若年女性を対象とした経年的なインタビュー調査のデータの再分析を、①消費文化、②親子関係、③「女性性」を売る労働との関わりの3点に注目して行い、高卒10年目における追跡調査を行った。それと同時に、東海・北陸地方のセクシュアルマイノリティの若者たちを対象としたインタビュー調査を行い、学校体験、学校から仕事への移行において直面した困難、その後の労働や生活の状況を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I analyzed again the data of panel research in which the study group I belong to interviewed non-elite young women in Tokyo, focusing on subculture, parent-child relationship, and the job selling "femininity". Additionally, I interviewed those women in their 10th year after graduating from high school. Simultaneously, I interviewed sexual minority youth in Tokai and Hokuriku District. This research revealed how their school life, their transition from school to work, and their work and life were.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育学、ジェンダー、移行、若年労働市場

1. 研究開始当初の背景

1990年代後半以降の労働市場の変容に伴って生じている〈学校から仕事へ〉の移行の変化の実態を明らかにするべく、近年、調査研究が蓄積されてきている。ところが、それらにおいては、学卒後すぐに企業へと入職し、終身雇用を前提として仕事を教わりながら「一人前」になっていくという、戦後の男性

の標準的な〈学校から仕事へ〉の移行のありようが変化したことに関心がおかれている場合が多い。

そうしたなかで、高校・短期大学の新卒女性が結婚出産退職制度のもとに雇用労働者化していく労働市場システムが、1960年代から1970年代にかけて確立し、1990年代以降に崩壊し始めたという、女性の移行の状況について整理した重要な研究がある（木村

2005)。そこでは、高卒女性にとっては正規で就職する道が閉ざされているだけでなく、安定した職に就いている男性と結婚して主婦になるという選択も困難になりつつあることが指摘されている。同じ女性の中でも、高卒の若年女性、つまりはノンエリートの若年女性が不安定な状況に置かれているといえる。しかし、統計データを用いて学校卒業時点での進路状況を把握するにとどまり、彼女たちが卒業後どのような状況に置かれているかについてはほとんど明らかにされていない。

学卒後の就労に関する研究に目を向けて見ると、近年のフリーター研究は主に男性フリーターに注目し、ジェンダーという視点が乏しい一方で、これまで蓄積されてきた女性の非正規就業に関する研究は、もっぱら既婚女性の「主婦パート」に焦点をあててきた(本田 2002)。その結果、不安定労働に従事する若者は、男性よりも女性の方が圧倒的に多いにもかかわらず、現代の若年女性が学卒後どのように働き、生活しているかについての研究は少ない。

不安定な状況に置かれた若年女性たちの進路、労働や生活を取り上げた貴重な研究はあるが(内田 2005、小西 2003)、ある一時点の状況を把握するにとどまっておき、〈学校から仕事へ〉の移行過程のありようを明らかにするには不十分であるといわざるを得ない。

そこで、ノンエリートの若年女性たちが学卒後に辿る経路を、経年的な調査を通じて一定の期間に渡って把握し、考察する研究がされる必要があると認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究では、これまでほとんど注目されてこなかった、ノンエリートの若年女性たちの〈学校から仕事へ〉の移行のありようを、一人ひとりの人生経路を丁寧に追うことによって詳細に描き出し、彼女たちの労働と生活の世界に即して分析することによって、〈学校から仕事へ〉の移行を従来とは異なる図式で捉えることを目的とした。

その際に注目したいのは、第一に、彼女たちの学卒後の進路はどのように形成されたのかということである。進学も正規就職も困難な状況のなかで、ノンエリート女性はどのように自らの進路選択を行っているのかを明らかにする必要があると考えた。

第二に、離転職を繰り返す彼女たちの労働と生活における選択の一つひとつが、どのような条件のもとで強いられたものなのか、あるいは、生きていくためのどのような工夫として選ばれたものなのかということであった。それはつまり、彼女たちの生活や労働

のありようを、彼女たちの生活の文脈に即して、彼女たち自身による意味づけに着目しながら明らかにしたいということであった。

第三に、彼女たちが形成している人間関係であった(ここで人間関係というとき、生育家族、恋人や結婚相手、友人、地域住民、職場の同僚や上司などが含まれている)。彼女たちがどのような人間関係を形成し、それによりに支えられ、あるいは苦しめられながら生活しているのかを具体的に明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、大きく分けて二つの方法によって行った。一つ目は、報告者が行ってきた東京のノンエリート若年女性を対象とした経年的なインタビュー調査のデータの再分析である。再分析の際には、上記の研究の目的を達成するために、報告者がこれまであまり追求することができてこなかった三つのテーマを設定した。一つは消費文化、二つ目は生育家族の影響、三つ目は彼女たちの多くが従事していた「女性性」を売る労働との関わりである。こうした再分析に加えて、2003年春に高校を卒業した彼女たちをさらに追跡する調査を行いたいとも考えた。

二つ目は、東海・北陸地方で暮らす、生物学的には女性の身体を持って生まれたセクシュアルマイノリティ(トランスジェンダーの男性と、レズビアン)の若者たちを対象としたインタビュー調査である。これまで注目してきたジェンダーや階層という要因だけでなく、セクシュアリティという要因も分析軸に含める必要性が明らかになることが予想された。

4. 研究成果

東京のノンエリート若年女性を対象とした経年的なインタビュー調査のデータの再分析においては、家庭環境が経済的な自立に必要な進路の選択を制約していること、そして、彼女たちのまわりにある仕事はどれも不安定だということが明らかになった。こうした実態にさらに踏み込むために設定した上述のテーマに関しては、まず、女性たちが熱を入れていた「バンギャ」(ヴィジュアル系インディーズバンドの熱心なファンである女性のことを指す)の活動に注目し、それが彼女たちの生活を支えるものになっていた一方で、彼女たちにより困難な状況をもたらし得るものともなっていたことを明らかにする論文を執筆した。

次に、彼女たちの社会的自立への生育家族の影響、とりわけ母娘関係の影響に焦点をあてることにより、家庭内でのジェンダー分業

によって介護や育児を担わされ、行動も監視されて束縛されている状況を浮かび上げ、生活保護や就労支援のあり方について考察する論文を執筆した。それに関連して、生活指導研究において家族がどう扱われてきたかを整理して批判的に分析し、学会で発表した。

最後に、ノンエリート女性と「女性性」を売る労働との関わりについての議論を進展させることができた。彼女たちがどのような状況でそういった労働に入職し、どのような労働に従事し、どのような経緯でそこから退出し、その後どのような労働へと移っているのか、そして、そうした履歴を彼女たち自身はどのように意味づけているのかを、調査データをもとに分析した。このことを通じて、キャバクラ等の接待飲食業、性産業、出会い系サイトのサクラなどの電話を使った仕事というような、これまで個々に扱われてきた労働を、全て「女性性」を売る労働として捉えるという新たな枠組みを創出した（共著の図書として2013年夏に刊行予定）。

これらの再分析に加えて、高校を卒業して10年目に入った彼女たちを対象としたインタビュー調査を行うことができた。この調査を通じて、彼女たちがその後どのように働き、生活しているか、彼女たち同士の関係にどのような変化が起きているか（あるいは起きていないか）、それ以外の人たちとの間ではどのような人間関係を維持したり形成したりしているかなどについて把握することができた。

東海・北陸地方で暮らす、生物学的には女性の身体を持って生まれたセクシュアルマイノリティの若者たちを対象としたインタビュー調査においては、調査対象者の多くは短期大学・四年制大学の学生もしくは卒業者であったが、地方に生きる若者の学校体験、学校から仕事への移行において直面した困難、その後の労働や生活の実態を把握することができ、その結果を学会で発表した。それとともに、彼女ら彼らが形成している当事者コミュニティに参加することを通して、ノンエリートのセクシュアルマイノリティの若者たちにも接触する機会を得ることができた。

なお、研究開始当初は想定できていなかったことであるが、ノンエリート若年女性の労働と生活を研究的に明らかにするためには、近年ようやく研究されるようになってきている若者ホームレスの問題をも射程に入れつつ、福祉や医療など複数の領域に渡った総合的な視点を獲得しなくてはならないことが分かった。そこで、報告者が金沢市で行っているホームレス支援活動における若者のケースの検討を行った。ライフステージの早期にホームレスとなることによるアイデンティ

ティ形成の困難、就労規範の強さと就労の難しさとといった若者固有の問題があることを明らかにし、学会にて発表した。

以上の成果を通じて強く実感されたのは、若年労働市場の問題、女性差別の問題、ホームレスの存在に見られる貧困の問題、セクシュアルマイノリティ差別の問題は、個々に独立して起きているのではなく、互いに絡み合っているということである。加えて、本研究では十分に考察することができなかったが、東海・北陸で行った調査の対象者の中には、親がエスニックマイノリティである若者が複数おり、エスニシティの問題も含めて分析を進めることが重要な課題であることが浮かび上がった。

このことをふまえながら、今後は、調査期間終了間際に実施が可能となった、東京のノンエリート若年女性を対象とした追跡調査の分析を進めるとともに、東海・北陸地方のセクシュアルマイノリティの若者たちを対象とした調査においても、調査当時在学中であったり入職直後であったりした彼女ら彼らのその後の状況を聞き取る継続調査を行いたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 杉田真衣, 早く大人になりたいー生活困難層若年女性の仕事と家族, 女たちの21世紀, 査読無, 73号, 2013年, 36頁~39頁
- ② 杉田真衣, 高卒若年女性の仕事と生活ー二人の「バンギャ」の事例から, 人権と部落問題, 査読無, 803号, 2010年, 33頁~38頁
- ③ 杉田真衣, 地方に生きる若年同性愛男性の学校体験, 生活指導, 査読無, 686号, 2010年, 98~101頁

〔学会発表〕（計3件）

- ① 杉田真衣, 生活指導研究は親密な関係をどう論じてきたか, 第30回生活指導学会大会, 2012年9月2日, 立命館大学(京都府)
- ② 杉田真衣, セクシュアルマイノリティの学校体験ー女性規範との葛藤に焦点をあててー, 第71回日本教育学会大会, 2012年8月25日, 名古屋大学(愛知県)
- ③ 杉田真衣, ホームレス支援活動の現場から, 第29回生活指導学会大会, 2011年9月3日, 金沢大学(石川県)

〔図書〕（計1件）

- ① 竹内常一, 杉田真衣, (他66名), エイデル研究所, 生活指導事典, 2010年, 319頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉田 真衣 (SUGITA MAI)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：50532321

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし